

# 会 報 第11号

1991.3  
日本家庭科教育学会  
中国地区会

## 目 次

研究ネットワークづくりをめざして	(中国地区会会長) 中間美砂子	1
第10回 日本家庭科教育学会中国地区会研究発表会並びに総会報告		2
1 研究発表会		
2 総会		
3 10周年記念シンポジウム		
功労者を囲んで	三好百々江	3
《研究室から》	田結庄順子	3
《実践現場から》	石井 昌子	4
《研究発表要旨》		6
《シンポジウム要旨》「家庭生活」-何をどう教えるか		12
本部だより		
事務局だより		
編集後記		

## 研究ネットワークづくりをめざして

中国地区会会長 中間美砂子

昨8月、日本家庭科教育学会中国地区会10周年大会を開催することができ、さらに昨12月には、3年間にわたる共同研究の結果を報告書としてまとめることができました。

個々の点であった日本家庭科教育学会の会員が地区会結成により線になり、共同研究を通して次第にネットが形成されるようになってきました。

家庭科教育の振興をめざして結成された日本家庭科教育学会は、小、中、高、大、研究・研修機関の教育者、研究者を中心になりました。特に、地区会では教育現場と研究室の連携が重視されています。ようやく形成されはじめた研究ネットワークを活性化するためには、教育現場で活用できる研究を共同で進めていかなければなりません。

県、市の小学校家庭科教育研究会、中学校

技術・家庭科研究会、高等学校家庭科研究会などをはじめとして、各種の研究会が結成され、それぞれ研究活動を積み重ねてきています。また、県・市の研究センターなどでも研究活動が続けられています。しかし、これらの研究は、それぞれの各機関、研究会、学会等のなかだけのものになっており、各機関、研究会、学会等の相互関係のなかで、活用されているとはいえない状況にあります。これらの研究を交換したり、相互に評価しあうところに、はじめて研究の活性化が可能なのではないでしょうか。

地区会のありかたの一つの方向性として、共同研究を機に研究ネットワークづくりをめざして、一歩前進していきたいものです。

# 第10回 日本家庭科教育学会中国地区会 研究発表会並びに総会報告

第10回研究発表会、総会、並びにシンポジウムが平成2年8月24日(金)、山口大学で開催され、準備校の多大の御援助により、すべて盛会裡に終えることができた。

## 1. 研究発表会 (13:00~14:30)

(座長 杉原 黎子)

- ① 中学生の家庭生活と家庭科  
鳥取県大栄町立大栄中学校 戸田美和子  
島根大学教育学部 ○多々納道子
- ② コンピュータを使用した授業の分析  
-栄養価計算のアプリケーションソフトによる「栄養のバランスのとれた食事」の指導-  
広島大学教育学部 ○中村喜久江  
広島県立廿日市西高校 粟根 知香
- ③ わが国における家庭科実習施設の変遷  
(戦後~現在まで)  
広島県立海田高校 芦田 迪子  
(座長 福田 公子)
- ④ 高等学校「消費生活」に関する教材開発と授業研究-消費生活における広告の効果と問題点-  
広島市立安佐北高校 ○蔵田 裕子  
呉市教育委員会 佐々木信子  
元広島県立海田高校 中野田明子  
広島大学学校教育学部 中間美砂子  
元広島市立美鈴が丘高校 松田 恵
- ⑤ 広島郷土食教材化の試み-日本型食生活の見直し・形成・定着をめざして-  
広島文教女子大学 長石 啓子
- ⑥ 中学校「家庭生活」領域に関する教材開発と授業研究-わたしと家族-  
広島女子大学(非) 桑原 敏子  
広島大学学校教育学部 中間美砂子  
広島県立海田西中学校 若杉 玲子  
広島大学附属中・高校 ○舟田 静江

## 2. 総会 (14:30~15:00)

- 1) 閉会の辞(友定 啓子)
- 2) 地区会会長挨拶(中間美砂子)
- 3) 議長選出(上村 元子)
- 4) 議事
- (1) 平成元年度庶務報告(望月てる代)
- (2) 平成元年度会計報告(望月てる代)
- (3) 平成元年度会計監査報告(多々納道子)

### <協議事項>

- (1) 平成2年度事業計画案の審議
  - ① 地区役員会の開催  
平 2.8.24. 山口大学学生会館
  - ② 研究発表会並びに総会開催・10周年記念誌発行  
平 2.8.24. 山口大学学生会館
  - ③ 共同研究『家庭生活に関する教材研究と授業研究』報告書発行  
平 3.3.
  - ④ 会報第11号発行  
平 3.3.
- (2) 平成2年度予算案の審議 可決された。
- (3) 平成3年度大会開催について

準備校は広島大学教育学部に決定した。

- 5) 功労者記念品贈呈
- 6) 閉会の辞(友定 啓子)
3. 10周年記念シンポジウム (15:00~16:45)  
テーマ「家庭生活」-なにをどう教えるか  
シンポジスト-榎田真澄・久我俊子・永尾忠子-  
司会 田結庄順子

## 平成元年度日本家庭科教育学会中国地区会決算 (自平成元年4月1日 至平成2年3月31日)

《収入の部》 (単位:円)

費目	予算額	決算額	摘要
前年度繰越金	170,143	170,143	
地区会費	100,000	116,000	1,000×116人分
本部からの還付金	54,810	46,200	525×88人分
教大協からの補助金	40,000	40,000	
雑収入	2,000	2,546	利子
合計	366,953	374,889	

《支出の部》 (単位:円)

費目	予算額	決算額	摘要
総会費	70,000	70,000	
共同研究補助金	100,000	100,000	印刷費として積立
通信費	50,000	45,760	
事務用品費	20,000	400	
会議費	20,000	8,615	
会報印刷費	65,000	77,500	会報、会員名簿、封筒、消費資料、振込
雑費	5,000	2,571	
予備費	36,953	5,000	原稿謝金
次年度繰越金	-	65,043	
合計	366,953	374,889	

## 平成2年度日本家庭科教育学会中国地区会予算 (自平成2年4月1日 至平成3年3月31日)

《収入の部》 (単位:円)

費目	予算	摘要
前年度繰越金	65,043	
地区会費	100,000	1,000×100人分
本部からの還付金	46,200	525×88人分
教大協からの補助金	40,000	
雑収入	2,000	
合計	253,243	

《支出の部》 (単位:円)

費目	予算	摘要
総会費	70,000	
共同研究補助金	50,000	印刷費として積立
通信費	20,000	
事務用品費	2,000	
会議費	10,000	
印刷費	50,000	会報
雑費	5,000	
10周年記念事業費	30,000	
予備費	16,243	
合計	253,243	

## 功労者を囲んで

福山市立女子短期大学 三好 百々江

残暑厳しい8月24日、山口大学学生会館で開催される中国地区会10周年記念の研究発表会を前に、地区会発足当時からここまでご尽力、ご支援いただきました桜井リツ子先生、桑原敏子先生、西村綏子先生をご招待して昼食会が催されました。ほかに、山口大学から渡辺先生、北川先生、学会から小林先生と三好が出席しました。

桜井先生は家庭科教育学会創立当時から、学会の中国地区委員として10年余にわたり絶大なご尽力を賜り、早くから地区会設立の基盤作りに寄与されました。それをうけて、桑原先生・西村先生を中心として念願の中国地区会発会を実現されました。桑原先生は初代会長として、研究発表会や学会本部との連携による研究活動を進められ、初めての地区会共同研究をスタートさせられ、地区会の仲間づくりにご尽力下さいました。次期会長の西村先生は共同研究の成果を「児童・生徒と祖父母とのコミュニケーション」の報告書として刊行され、今日の、名実ともに充実した飛躍へのパワーのある中国地区会に、育成していただきました。

昼食会では、3先生を囲んでなごやかな歓談が交わされ、話題は、昭和56年の中国地区会設立当時にさかのぼり、先生方の御苦勞話もうかがいました。さらに、新学習指導要領の告示により、これからの家庭科教育のあり方を考えることについての意見交換があり、現在の家庭生活には多くの問題点があるがその解決には、家庭生活を人間形成の場とする家庭科教育が重要であろうなどの助言をいただき、短い時間がくやまれるような充実したひとときを過ごしました。

3先生のますますのご発展と、今後のご指導、ご支援を心からお願い致します。

## 《研究室から》

### 自立をもとめて

鳥取大学 田結庄 順子

鳥取大学教育学部家庭科には、省令学科目が5つ（家庭科教育、家庭管理、食物学、被服学、保育学）あるので、研究室はスタッフの人数分（食物学は2名）の6研究室ある。

私は鳥取大学に着任して19年余になるが、はじめの5年間は家庭管理の学科目で家庭科教育の授業も兼担し、つぎの8年間は家庭科教育の学科目で家庭管理の学科目も兼担していたので、名実ともに家庭科教育の学科目の授業のみ担当するようになったのは今から、6年前のことである。

したがって、卒論においても、自身の研究においても、子どもの自立と家庭科教育の関連、家族の動向と教育の課題、生活の現状と課題、生活時間と福祉のあり方、女性のライフサイクルと生活福祉、消費者教育の今日的課題など、教育と生活、福祉に関わる学際的な研究テーマのウエイトがやや大であったが、近年はもっぱら共学家庭科の教育内容と教育課程の研究に重点をおいてきている。その成果は『共学家庭科の理論』『共学家庭科の実践』（いずれも村田泰彦、一番ヶ瀬康子、福原美江との共著、共編、1986年 光生館発行）『新しいくらしをつくる家庭科の授業』（村田泰彦編 1989年 ぎょうせい発行）などにまとめて公表してきた。

家庭科の共学の問題は、1960年代半ば、溝上泰子先生の生活哲学、家庭関係学、村田泰彦先生の家庭科教育法や家庭科教材研究の授業を受け、卒論も村田先生の指導で書いて以来、考えてきたテーマで、もう4半世紀が過ぎたことになる。

就職した1970年代のはじめの頃は、「家庭科は共学にしてこそ意味がある」と当たり前のことを主張すると、「そんなことを言うのにらまれますよ」と先輩の先生からわざわざご助言をいただいたものだが、昨今の「家庭科は共学でしてこそ意味がある」と言わない人は不思議がられる時代になるとはまさに隔

世の感がする。「家庭科を共学で行うことが、当たり前時代がくる」と教えてくださった村田先生にはただただ感謝するのみである。

翻って、学内の事情とはいえ、家庭管理のいくつかの授業を担当していたことはマイナスではなく、むしろプラスの方向に作用している(作用していると思いたい願望もあるが)ことが多く、卒論の学生には自由に、自分のやりたい、好きなことを選ばせているので、そのようなときに役に立つ。

家庭科という教科は家族、福祉、消費者問題、生活課題、食生活、衣生活、住生活、保育、看護とその領域が多岐にわたり、また、昨今は複雑かつ変貌のスピードが急速なため、情報を収集し、データを出し、分析し、ある方向を出したり、提言する作業は非常に骨の折れることである。特に、山陰という「日本の底辺」(溝上先生の著名なご著書名から)、文化の過疎地にいるものは、情報の収集が困難で、国会図書館や国立教育研究所、国民生活センターなどのある都会の人をどれだけ羨ましく思ったことか知れない。しかし、地方にいる者にも、それなりの道もあると思うことにしている。

今年の卒論生は3名で、「食生活教育の今日的課題」「生産から消費までを見通した中学校家庭科教材の開発」「共学家庭科における自立と共生」の研究テーマに取り組み、中学生、高校生、大学生にアンケート調査をしたり、聞き取り調査に出かけたりの毎日である。

かつての家庭や地域が持っていた教育の機能がそうした現在、学校の家庭科が担うべき課題が多い。それが続く限り、私どもの研究課題もつきないし、時代の進展と共に、新たな研究課題もでてきている。

人間が真に人間らしく生活できる力を獲得し、みかけの「豊かさ」でない、まことにゆとりのある豊かなくらしができることを願って、学生と共に悪戦苦闘している毎日であり、この状況はしばらく続きそうである。

## 《実践現場から》

### 小学校家庭科における栄養指導に関する研究 -第6学年「弁当の献立作り」を通して-

岡山市立竜之口小学校 石井 昌子

#### 1. 研究にあたって

小学校家庭科は、児童にとって楽しい教科になってきている。その中でも食物領域の調理と会食は意欲的に学習を展開してきている。

しかし、栄養に関する学習は、目や手で直接確かめる事ができず知的学習に陥り易く児童にとって興味を持って学習できない項目になっている。それだけに動機付け・資料の提示方法・授業の在り方の問われる題材である。

今までには、カード作り・カルタ作り、給食指導・保健指導・理科学習等の関連と発展等が工夫されてきているが、確かな理解の上になって、バランスのよい食事のとり方を実践していく手がかりには至っていない。

そこで、この題材を通して、家族が健康で楽しく生活する基になっている食生活を見直し、よりよい家庭生活を旨として実践していく態度を弁当作りという体験的学習の過程で育てたいと考えた。

#### 2. 研究の概要

- (1) 食事調べ(1週間分の家庭の食事調べ)
- (2) 遠足の弁当調べ(栄養の点からの観察)
- (3) ぼく・わたしの弁当作りの献立作成の検討

#### (4) 栄養についての弁当作りの授業実践

- ① 題材 「日常の食事」-食事の計画-
- ② 目標・自分の食事の実態に気づき、よりよい食生活のしかたがわかる。
  - ・加工食品や食品添加物に気づき安全性に注意して食品を選ぶ事ができる。
  - ・ごはんのみそ汁の栄養上・調理上の特徴がわかる。
  - ・食事を計画的にとるためには献立が必要である事に気づき、食品の組み合わせを考え、1食分の献立を作る事ができ生活の中で実践できる。

③ 指導計画（全10時間）第三次第3時  
…本時

④ 指導上の立場（一部省略）

弁当の献立作りの5条件

- 六つの食品群の全部から食品を選んで組み合わせること(分量は考えなくてよい)
- 家庭実践をねらって1時間で手早くできる献立であること。
- ごはんを主食として加工品を組み合わせてもよい。
- 既習の調理技能でできる献立であること
- 予算は一人500円以内であること

⑤ 本時の目標（省略）

⑥ 学習過程（省略）

⑦ 児童の考えた弁当の献立例（表1）

⑧ 児童の弁当作りの感想（表2）

3. まとめと今後の課題

児童にとっては、献立を考えて弁当作りというイメージが、「家族や友達と戸外で食べる。」という楽しさにつながり意欲的に学習することができた。

しかし、小学校段階では、望ましい食事のとり方がわかるという知識・理解事項であらわされている1食分の献立を調理することができるという技能をとまなう事項にまで高めることは容易なことではなかったが、実践的

態度の育成には成果をおさめる事ができた。

夏休みには、96%の家庭実践が認められ、何度も工夫した弁当作りの報告があった。けれども定着や継続については今後の追跡が必要である。

児童には弁当作りという楽しい操作をさせながら指導者は栄養指導をねらったわけであるが、展開していくうちに栄養指導のみならず家庭科の多くの内容がある事が判明した。

この題材では、基礎的調理技能の応用発表・消費者教育学習・個に応じた伸長の場の設定・食生活への自立的学習等多くの小学校家庭科の現代的な問題解決ができる有効な学習内容が含まれているため、違った視点からの研究も期待できるすばらしい題材であることがわかった。今後の課題として研究を進めていきたい。

児童の感想（B夫の実践ノートより）

「ぼくのぼくが弁当を作るのがどう。心がこめられているね。と教頭先生に言われてうれしかった。4日以内で作ったと言った。びっくりした。と言われ大がんな味のな？ 大がんな味の心の味と言ったのかな？ 1日1日や無難さを多くする工夫に苦労した。にんじんや豆は、生けてはじめてた。みんなが新鮮さを食った。おのあさんに自習してやっていた。夏休みには、ぼくが、心とはおのあさんに栄養についての献立を作った。食べてもらう番だ。目標がたった。かんばるぞ！

(表・1) ぼくの べんとう作り こんだて表

こんだて	食品名	食品群	炭水化物	たんぱく質	無機質	チカノロ	ビタミン
ごはん	米		○				
おにぎり	のり				○		
肉じゃが	ぶた肉			○			
	じゃがいも		○				
たこくん	ウインナー			○			
ウインナー	ソーセージ			○			
野菜サラダ	キャベツ						○
	ハム			○			
	かいわれ大根						○
	フレンチドレッシング		○				
	パセリ					○	
	ミニトマト					○	○
洋風卵焼	牛乳				○		
	卵			○			
	にんじん					○	
	グリーンピース			○			○
きゅうりとじゃこのちくわまき	ちりめんじゃこ				○		
	きゅうり						○
	ちくわ			○			
くだものつけあわせ	リンゴ						○
	ゼリー						○

## 《研究発表要旨》

(発表番号1)

### 中学生の家庭生活と家庭科

鳥取県東伯郡大栄町立大栄中学校 戸田 美和子  
島根大学教育学部 ○多々納 道子

#### 1. 目的

平成元年3月に学習指導要領が改訂され、中学校では平成5年度より全面实施されることになっている。改訂点の一つに、「家庭生活」領域を新設し、学年を指定して男女ともに学ばせる、という項目がある。領域の目標は、「家庭生活に関する実践的・体験的な学習を通して、自己の生活と家族の生活との関係について理解させ、家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」ことである。

「家庭生活」領域中の「家庭の仕事」の指導計画を立てるのに先きだって、現在の中学生の家庭観、家庭の仕事の分担についての考え方、あるいは、母親のしつけ観などを把握しておきたいと考え、以下の調査を実施した。

#### 2. 方法

- ・調査対象 鳥取県中部中学校(2校)の1年生  
男子 162名 女子 172名 とその母親
- ・調査期間 1989年6月1日～6月30日
- ・方 法 アンケートによる調査
- ・有効回答率 男子とその母親 79.4% 女子とその母親 80.3%

#### 3. 結果・考察

##### 1) 「家庭の仕事」に関する中学生の意識と実態

家庭の仕事は、「男女平等に」「話し合って」するのがよい、と答えている中学生の割合は74.3%と高い。ところが、各家庭においてはその大部分を母親が受け持っている。円滑な家庭生活を営むために、中学生が分担している仕事はきわめて少ない。しない理由の中に、少数だが、「男だから」、いつもする理由の中に、「女だから」と答えているものもあり、意識と実態との間に差違がみられる。

##### 2) 母親のしつけ観

現在の中学生の分担している家庭の仕事の数は、母親が中学生であった頃とは比較にならないほど少ない。母親には、子供を積極的に家庭の仕事に参加させようとする意欲が希薄である。

以上の点から、現代は親から子へと伝えられてきた、人類の知恵の集積とも言うべき生活技術が伝わりにくくなっている時代といえる。同時に、家庭の仕事を分担することによって得られる家族の一体感、それによって培われる計画性や忍耐力なども期待できなくなっている。「家庭生活」領域は、中学生の実態をしっかり把握したうえで指導にあたるのが大切であると考えられる。

## コンピュータを使用した授業の分析

栄養価計算のアプリケーションソフトによる「栄養のバランスのとれた食事」の指導

広島大学教育学部 ○中村 喜久江  
広島県立廿日市西高等学校 粟根 知香

### <目的>

平成元年3月に告示された新学習指導要領では、小・中・高等学校の全学校段階を通して教育内容、教育方法の両側面からコンピュータの導入が提示された。家庭科教育における教育方法としての側面を見ると、食生活領域の献立作成、栄養価計算、衣生活領域の型紙製図、デザイン等の指導にコンピュータの活用が多いのが現状である。しかし、まだコンピュータのどの機能が家庭科教育に活用出来るかという論議の段階ではないだろうか。コンピュータで代替出来る部分、代替させてはならない部分の吟味を充分行うことが早急に必要であり、これを踏まえた上での導入、活用でなければならない。加えて、教育機器としてのコンピュータの効果的活用方法（アプリケーションソフトの構造、ディスプレイ表示の方法、キーボードによる入力方法等）、授業における位置づけ、効果的な導入場面等の的確な研究が必要である。そこで、本報告ではコンピュータを使用した授業を分析することによりこれらの問題点を検討し、改善の方策を明らかにするものである。

### <方法>

対象は、県立F高等学校生活科学科食物・栄養コース、2学年、女子22名である。指導内容は、1日の食事（献立作成、作成した献立の入力、コンピュータによる栄養価計算）、栄養のバランス（コンピュータによる料理の組み合わせ方の演習）について合計7時間、実施期間は、1989年9月20日～30日である。これらの授業の内5時間分をVTRに収録した。

授業実践記録のカテゴリー分析、事前調査、事後調査により検討を加え、考察した。

### <結果及び考察>

1. コンピュータリテラシーが育成された。すなわち、本アプリケーションソフトの使用により、フロッピーディスクの管理、キーボード操作（RETURNキー、ファンクションキー、カーソル移動キー等の意味の理解）等が出来るようになった。
2. 本授業内容を自主的に学習しようとする意欲が高まった。すなわち、経時的に見ると実践記録が進むにしたがって生徒から教師への質問が減少し、生徒間で問題を解決しようと試みる傾向がみられた。情報収集意欲も高まり、単に教師の指示にしたがって作業を行うのではなく、生徒間で協議の上意志決定が行われる頻度が増加した。また、ことにより授業が活性化した。
3. 本授業時間内に、班毎に作成した献立を全ての生徒が各自で入力し、栄養価計算を行い、栄養バランスの取れた献立作成の演習を行うことが出来た。本アプリケーションソフトのトラブルに対処する時間が必要であったこと、本授業がコンピュータを使用した授業の初回であったことを考えると、本指導内容に必要な授業時間数は短縮されるものと思われる。よって、「栄養バランスの取れた食事」の指導の省力化が出来るものと考えられる。

(発表番号3)

## 「わが国における家庭科実習施設の変遷」

(戦後～現代まで)

広島県立海田高等学校 芦田 迪子

### 目的

これからの家庭科実習室の方向性を探る目的で、先に明治時代から昭和時代中期にいたる家庭科実習室の発達経路を、家庭科教育とのかかわりの中で明らかにしてきた。

今回は前報につづき戦後から現代にいたる家庭科実習室の変遷を検討したので報告する。

### 調査方法

前報同様教育制度に視点をあて、女子中等教育の中で行われた家庭科の教育内容を明らかにしてゆくことにより、家庭科実習室の発達経路を追求することにした。

### 結果

家庭科は、戦後の教育改革の中で大きく変様した。即ち、教育方法の新しい特徴として、1. ミシンと型紙利用による洋裁の導入、2. 家族関係や家庭経営の重視、3. 家事労働に科学性と合理性を導入したこと、などであった。また、新しい指導法として、「なすことにより学ぶ」経験主義の立場で、プロジェクトメソッド、ホームプロジェクト、学校家庭クラブ活動を取り入れたこと、などであった。これらの教育内容、教育方法の変革は、家庭科実習室にさまざまな変様をもたらした。昭和26年「産業教育振興法」に基づき、昭和27年「設備基準」が作成された。これにより、新しい施設として家庭実習の家（ホームマネージメントハウス）が、また、新しい設備としてミシンや、改善台所（ユニットキッチン）が整えられることになった。

その後も、これらは家庭科実習室変容の要因となっている。

### 共同研究について

3年間にわたる共同研究結果の報告書をお届けいたします。この共同研究を通して、研究グループが形成され、教育現場と研究室との関係がより密になってまいりました。折角できたこの研究グループを中心にさらにネットワークを広げ、共同研究を続けていきたいと思っています。

下記により、新たに共同研究のメンバーを募ります。ふるって御応募下さい。

テーマ 「家族・家庭生活」にかかわる領域の教材開発と授業研究

期間 平成3年4月～平成5年3月

応募方法 各県役員あて 4月末日までに

はがきまたは電話で申し込む

(中間美砂子)



## 高等学校「消費生活」に関する教材開発と授業研究

－消費生活における広告の効果と問題点－

広島市立安佐北高校 ○蔵 田 裕 子 呉市教育委員会 佐々木 信 子  
元広島県立海田高校 中野田 明 子 広島大学学校教育学部 中 間 美砂子  
元広島市立美鈴が丘高校 松 田 恵

### 目的

新高等学校学習指導用要領において高等学校家庭科にも消費生活に関する項目が明確に位置づけられた。また、現代は情報化社会といわれ、私たちの周りには多種多様の情報が氾濫している。健全な消費生活を営むためには、情報を正しくとらえ適切な生活情報の選択と活用ができる能力が必要である。そこで高校生の主な情報源の一つである広告を使い、消費生活における ①広告の役割、②意志決定に広告が与える影響、③広告の問題点について考え、消費生活における適切な生活情報の選択と活用できる能力の育成を目指した授業研究を行った。

### 方法

1. 広島市内の公立高校6校の高校生1,848人を対象に実態調査
2. 広告を題材にした授業計画
3. 広告作成とロールプレイングによる学習活動の展開
4. 意識調査による学習効果の検討

### 結果・考察

1. 新聞・テレビ等のマスメディアと友人からの口コミを主とし多種多様の情報が氾濫していることが明らかになった。
2. 班ごとによる広告の作成、広告を利用した模擬販売を通してキャッチフレーズの問題点、消費生活と広告について考えさせた。
3. 授業以外に昼休憩・放課後を使ってシャンプーの広告を作成。各班2分間の売り込みをし、相互評価をした。
4. 生徒の感想に“協力して楽しかった”“広告をよく見てキャッチフレーズや雰囲気だけでつられないようにしたい”などがある。また、新製品を購入するか決めるとき、“何となく”や“人にすすめられて”が減り、“自分で試してから”が大幅に増えたことから学習の成果があったことがうかがえる。

広告を作成するために、広告を隅々まで読み、広告にはどんな事がどのようにかかっているのか、日頃ほとんど意識していない広告に自分は左右されていることに気付く生徒が多かったようである。また、キャッチフレーズについてはおおげさなのが当たり前と考えていながら、キャッチフレーズの効能に期待して商品を選択し購入していることが分かり、新製品を購入する際の考慮する点についても理解できたようである。

## 広島郷土食教材化の試み

—日本型食生活の見直し・形成・定着をめざして—

広島文教女子大学短期大学部 長石啓子

### <目的>

トンガでは伝統的な食生活をして“健康的な肥満”と言われていたが、近代化の進むコロフォオ地区に健康悪化が見られると言う。日本においても長寿日本一、即ち世界一長寿地域である沖縄県で、最近の若者の食生活が極めて高脂肪化しており将来が心配されている。国民栄養調査にみる栄養摂取状況年次推移にも脂肪摂取量の増加が見られ、健康を阻害する状況である。そこで、日本型食生活に目を向け現代の食環境に適應する食生活を形成し、定着させる提言がなされている。日本型食生活を代表するものの一つにふるさと食事と言われる郷土食が挙げられる。郷土食はそれぞれの地域の特性を背景に、健康な食生活を目指す先人の知恵によって形成された食文化である。従って、食生活における文化の伝承という価値を前提に、学校教育における郷土食の家庭科学習への位置付けを指向して本研究に着手した。その第一段階として児童・生徒の郷土食摂取の実態を把握することを目的としてアンケート調査を実施し、既報（日本家政学会第42回大会発表）の結果を得た。即ち、現代食では全国とほぼ変わらない食生活を営んでいる小・中・高校生に郷土食では地域差がみられた。概ね①その地域の郷土食が食べられていて、②学年進行と共に好むようになり、③山間部よりも広島湾沿岸・島しょの方の摂取回数と嗜好の相関が高く、④核家族より拡大家族の方によく食べられており、⑤或る地域だけに食べられている代表的なものは、備北山地のワニと瀬戸内沿岸・島しょのイギスであった。以上から、既にワニ料理で試みられている現代的食べ方の開発、及び、“日本型PFC比”賛美に終わらない食べる行動、作る行動、それらにかかわる伝承行動を含めての食生活の研究、そして、自然的・社会的環境とのかかわりを重視しながら、その地域の人々の健康づくりにとって、どんな食生活が望ましいかにこだわっていかねばならない—教材化の必要を感じた。そこで本報では、広島郷土食の家庭科授業への教材化の背景となる諸要因、諸条件を調査、アンケート調査の嗜好に関する因子分析を行い、それらをふまえて教材への試作品を何品か作成することを目的とする。

### <方法>

①アンケート調査（既報—広島県下6地域の小学校5・6年生、中学校2年生、高等学校2年生の男女1928名を対象に、郷土食30品目・現代食30品目について、1989年7月～9月実施の因子分析、②広島における日本型食生活・郷土食に関する研究、実践についての調査（聞き取り）③中学校家庭科における日本型食生活・郷土食への取組みに関する調査（郵送又は電話）④中学生の健康調査、⑤教材の試作

### <結果>

嗜好に関する6地域全体の因子分析では、牡蛎飯・箱寿司・いわしのなます等広島の代表的な郷土食で酢に関わる料理、こうたけ飯・りょうぼ飯・うずめ飯等山の幸を使った飯類、どじょう汁・うずみ等汁のものが嗜好得点の高くなることを説明している因子のようであり、現代食では油もの・甘いものがそれである。従って、油と甘さの現代食の中へ広島の産物を生かした郷土食をミックスして食べる試みへの可能性が伺える。

## 中学校「家庭生活」領域に関する教材開発と授業研究

—わたしと家族—

広島女子大学(非)	桑原敏子
広島大学学校教育学部	中間美砂子
広島市立海田西中学校	若杉玲子
広島大学附属中・高等学校	○舟田静江

### 目的

新教育課程において中学校「技術・家庭」に男女共学の「家庭生活」領域が新設されることにより、小学校・中学校・高等学校に一貫した「家庭生活」の学習領域がうまれる。本校では従来、中3において保育領域に関連づけて「幼児と老人」を主題に“家族”を扱ってきたが、いまひとつ“家族”について把握しにくい。精神的に自立を求め、社会や生活についての構造や実態に関心の強い中3のこの時期に『家族とは何か、わたし(自分)との関係でその機能や人間関係について考えさせる』教材の開発を試みた。

### 方法

中学生の家族の実態と家族についての認識を把握するために304人を対象に調査、授業を設計、実施した。人の一生のうちの「幼児と老人」について学習を終えたあと、その中間にある青少年期の自分自身は家庭生活の中で、また家族の一員としてどんな立場にあるのか『家族とは何か』を考えさせるため、NHKドラマ「青春家族」の家族の一人「大地君」が丁度中学3年生で進路について家族と話し合いをもつところ等を視聴し“家族”についての理解をはかった、後、自由記述によりその把握のようすを考察した。

### 結果

視聴前後の調査で「進学のことや、将来のことを家族と話したことがありますか」の問に、視聴前男子の85%女子の100%が母親と話しており、父親とは男子の60%女子47%が話している。視聴後は男子の65%女子の76%が父親と話したいと答えている。また「お母さんが外で働く(職業労働)ことについて、どのように思いますか」の問には男子38%女子53%が賛成、男子29%女子6%が反対で残りの者は条件付賛成を示している。「祖父母との同居」については男女とも約半数の者が賛成しており、「父親の単身赴任」については男子38%女子41%が単身赴任は「いいとは思わない、してほしくない」としている。「家族」とはどういうものとの問に視聴前は〔安らぐ 休まるもの〕〔助け 理解し 支えになるもの〕〔信頼できる 親密で素晴らしいもの〕〔本心話すことができるもの〕〔無いと困るもの〕などの語彙がみられたが、視聴後は上記の他に〔協力しあって～〕〔どこかでつながっている 一つになって〕〔本音でものを言えるので互いに高めあうことができるもの〕〔一人々が一人の人間として尊重されているので自由に自分の考えが言え、自分の考えで自分の道を歩めてよい〕などドラマ「青春家族」の家族像にみられる「自立した者同士が協力し合ってよりよい生き方を見つけたしていく」これからの家族に最も求められるであろう姿勢をも読取り理解を深めることができた。教材「青春家族」の使用は効果があった。

## 10周年記念シンポジウム

### 「家庭生活」－何をどう教えるか

シンポジスト

櫛田 真澄氏（岡山大学教育学部）

久我 俊子氏（島根大学教育学部附属中学校）

永尾 忠子氏（広島県立松永高校）

司会

田結庄順子氏（鳥取大学教育学部）

研究発表に引き続き、上記4氏によるシンポジウムが開催された。はじめに各シンポジストから基本報告があり、後に討論が行われた。

櫛田氏はまず、今回の指導要領の改訂は性別分業の一掃、および教科構造の小中高の一貫性の確立という点で家庭科教育史上有意義なものであるとした。次に現場教師が共修を実践に移していく上での問題点を調査に基づき発表された。その際に中学生の家族に対する認識の発達をとらえる大まかなめやすを示され「家庭生活」は低学年では「ミニ家庭科」になる危険性があり、高学年の方がよりふさわしいとの見解であった。さらに教師の「家族観」も重要な要素として示された。

次に久我氏から、これまでかげに隠れていた「家族」が前面に出てきたことは家庭科の本質的な目標に近づいてきたとしながらも、現場では「家庭の仕事」の部分が矮小化される傾向があると指摘された。また「家族」の授業方法の実践研究から、生徒は単なる討論よりは「ドラマ化」などの方がより意欲的に取り組み、後の発展にもつながることを発表された。中1の場合には、基本的には現在の自分の家庭生活をどう生きるかという設定になるとし、そのためには家族に関する共通の基盤を生徒の中にどう作るかが課題となり、資料の精選が必要であると述べられた。

永尾氏は高校での「家族」の授業実践を紹介された。高校生は家族そのものあまり関心を持っていないが、人間が家族の中で一生を過ごすこと、その過程をたんねんに映像で流したところ、受験に追われている生徒にも問題を起こした生徒にも、今の自分にはっと気づき、立ち止まるという体験をさせること

ができた。このことから、適切なイメージ形成がその後の生活行動化につながり、さらにその中で自分を見つめるのではないかと述べられた。そして、考えることができない状況になっている、現在の高校生に家庭科は考えるチャンスを与える教科になりうると結ばれた。

以上の3氏の発表から、司会者は、①子どもの実態に即して、教師自身の家族観・家庭観はどうあるべきか、②「家庭生活」が1年という学年指定を受けているが、発達特性をふまえた上での教育方法、指導の工夫、③小・高との関連で「家庭生活」の領域はどうなるのか「ミニ家庭科」になる危険性についての3点にまとめ、討論に入った。

シンポジストへの若干の質疑のあと、フロアから高校での「家庭一般」での家族の実践例が紹介された。教科書では家族とは何か、家庭の機能を教えることになっているが、どうもそれでは生徒が乗ってこないのが、資料として1988年の新聞の「家族」の連載記事を分析し、それを分類したものを生徒に読ませた。はじめに時間をかけて読み、感動したところにラインを引き、次に自分の意見を加え、最後にノートにまとめるという方法をとった。生徒はこの授業に一生懸命取り組みノートを埋め尽くすほどであった。これは教師にも大きな収穫で、家族から離れているように見える生徒でも、老人問題を抱えていたり、父子・母子家庭であったり、家族問題をもちに体験している生徒が予想より多いことがわかり、クラスに返すこともできた。単に「理想の家庭」を示すことでは生徒はとらえることができない。家族を縦の流れで切ることできるが、横に切った形でもこんなことができる。これを受けて、生徒を共通の基盤に立たせることが指導のひとつのポイントであることが確認された。今までモノを中心にやってきたことを、これからは人を中心にどう組み変えるかが課題であり、そのための交流を図っていきたいという締めくくりがなされた。

（友 定 啓 子）

## 男女共学家庭科の実施状況と新設

### 『家庭生活』のカリキュラムについて

岡山大学教育学部 楠田 真澄

1989年3月に発表された家庭科の学習指導要領は、性別役割分業観が一掃されたこと、および教科構造としての小・中・高の一貫性が認められるに至ったという2点において特筆すべき特色を持っている。即ち、国民的一般教育として、男女を問わずに、同等に課せられる教科となるに至ったことは、家庭科教育史上その意義は大きい。

特に、中学校の新設領域『家庭生活』は、必修でもあり、教科構造の核となる部分である。教科構造として小・中・高の一貫性を保持するために『家庭生活』領域が、教育現場の教師たちの間で、その意義が正しく受け止められ、学習活動が円滑になされることが求められている。

本研究では、新学習指導要領の実施に関する、前提条件としての家庭科の男女共学の実施状況と、『家庭生活』のカリキュラム構成の諸問題について発表したい。

平成2年度(1990)は新学習指導要領に対して、既に実質的移行期に入っており、本年度から、男女共学を始めた学校は多い。したがって、昭和56年度(1981)実施のいわゆる『一部乗り入れ学習指導要領』が、平成元年度末(1990年3月末)までの9年間、移行期をも含めると12年の間に、どのような成果をもたらしたかを知ることは、今後の家庭科教育の動向を見る上で意義が大きい。即ち、男女共学であれ、内容の一部乗り入れであれ、教師が男子に対して、家庭科を教えてみたという経験は、新段階を迎えた家庭科教育の今後の方針を決定する上で、重要な事項であると考ええる。

そこで、岡山県における平成元年度末までの男女共学家庭科の実施状況を調査し(調査対象 中学校家庭科専任教師94人)、更に、新設領域『家庭生活』に対する不安や問題点を調査したので、その結果を当日発表したい。

また、この調査結果をふまえて、『家庭生活』のカリキュラム案を提示し、学習指導上の諸問題について述べることにする。家庭生

活は、家庭という場で営まれる家族関係を基盤とした生活である。時代の要請に応えることのできる家族観は、如何なるものであろうか。それは、第一に、家族成員のそれぞれに、独立した人格と自由な生き方を認めること、第二に、家族としての目的達成のためには、お互いの役割や仕事を代替え可能にすること、第三に、精神的な相互理解の姿勢を養うこと、第四に、核家族としての不安定さと脆弱性を補うために、地域社会との連帯と協力の精神を養うことである。このような家族観を基盤にしなが、小学校段階の初歩的学習事項が、中学校段階で全体的に受け止められ、更に高等学校段階での家庭一般に無理なく引き継がれるようにしたいものと考ええる。

最後に、中学校の現場における家庭科の男女共学の円滑なる実践および新設『家庭生活』領域の充実は、いうまでもなく家庭科教育の発展に直結するものであることを強調しておきたい。

### 生徒・保護者の実態を踏まえた 「家庭生活」の指導

島根大学教育学部附属中学校 久我 俊子

教科教育では、生徒の生活経験や意識などの実態を調査、分析することは不可欠であるが、特に新領域を指導するにあたっては、生徒が今どのような認識を持ち、何を求めているかを調査して、それに基づく指導がなされねばならないことは言うまでもない。現在の生徒達の家庭生活は様々であり、生徒や保護者の家庭生活観も多様化してきている。そこで、生徒、保護者の実態調査と、日頃接した保護者や生徒の対話を通して感じていることの中から、「家庭生活」に関わる三つの点について述べてみたい。

(1) 家庭の機能と家庭生活、家族関係について 家庭の機能として大切と思われるものを挙げさせてみると、親も生徒も共通して最も高かったものは「家族みんなが楽しく暮らす」ことであった。それに続くものとして親は、「子供を良い人間に育てる」、「夫婦円満」などの順になっているが、生徒は、「寝たり休んだりする」、「衣食住が与えられる」ことであった。また「余り考えたことがない」;

「よくわからない」等と答えている生徒も多数いた。このように家庭の機能や家族についての価値観が単純で、生活実感の低い中学一年生でこの内容を扱うためには、新聞記事や、書物などから資料を選び、その読後感を中心に授業を進めるなどの工夫が必要であろう。現代の中学一年生の実態はわがまま、自己中心的で、家族や家庭に対する不満を持っている生徒もかなり多い。このような中において、理想とする家庭や家族の在り方を教えるだけでなく、様々な家庭があることを理解させた上で、家族ひとり一人が置かれた立場や、親の願いを考えさせる。そして、その中において、家族の一員としての自己の在り方を考えさせるのが中学一年段階での目標ではないかと思う。

(2) 消費者教育について 消費者教育は、今日の経済システムの中で様々な情報や知識をもとに、総合的に判断して、自己の行動を主体的に行うことのできる消費者を育てるために重要なものである。しかし、中学一年生の実態は、買い物の経験も少なく、消費者としての自覚がない。そこでこの学習も、買い物体験の場を意図的に与え、その体験の中から生じた様々な問題をグループごとに主体的に追求させることも一つの方法であろう。(時間はかかるが、)

(3) 家庭と地域社会との関係について 自己中心的な考え方は、生徒のみならず親にも見られ、家庭と地域社会との関係も軽んじられている。しかし、生徒の大半は核家族であり、その核家族は、社会への依存度の極めて高いものであることに気づかせなければならぬ。そして、地域社会との良い関係を保つために生徒はどうあれば良いかを考えさせることは大切である。この指導も、生徒の良い体験があればそれを中心に展開させるが、適切なものがないときは新聞記事やVTRなどの資料を使って話し合いを深めていくのも良いと思う。

これらの指導はすべて、生徒の実態を考慮しながら、教師が本質的理念に基づく確かな教育観、家庭生活観を持って当たらねばならない。

## －高校で家族・家庭生活をどう教えるか－

広島県立松永高等学校 永尾忠子  
男女が学ぶ家庭科として、今回の学習指導要領の改訂で、家庭一般・生活技術・生活一般の三科目がもうけられた。これら、必修三科目に共通して「家族と家庭生活」を中心に「家庭経済と消費」「親の役割」などがとりあげられる。

家庭科教育の目標は家庭生活を中心とした人間生活を総合的にとらえてこれを追求し創造する実践力をもった人間の育成である。家族を中心に、人間が生まれ、発達し老いてゆくことに影響を与える人や物、社会的な環境、人間としての生き方の認識が重要となってくる。単なる物質的観点からでなく家族間のコミュニケーション、精神的な絆とか、家族の愛情にきづく必要がある。

ところが高校生達にとって、自己を含めた人間の命の認識や、生活への関心や、価値観は殆ど意識されていないのが現状である。

そこで、自分の誕生から、今の自分、老いて死に至る一生に於ける多様な関係の場面を、指導方法の工夫により、具体的にとらえさせて生き方にせまらなければならない。

家族と環境との関係をどうとらえ、その関係を相互にどう保つかこれは又、地域社会との連帯も必要になってくる。

生活設計、自分のライフステージの一つとして、子育て期における親の役割は勿論、子育て後をどういきるか、老後の生き方が大きな課題になってきている。各発達課題をクリアしていくためには各段階の移行期に生じやすい発達危機や、偶発的に生じる状況危機への対処能力、いわゆる問題解決能力が必要になってくる。

特に、高齢者の生活と福祉の学習にあたっては、地域社会とのソーシャルネットワークをかくことはできない。

老人・障害児・病人の生活にとっても大切になる。

このような内容の学習に擬似体験学習を取り入れ教材開発をし将来への対応の技術・実践的態度を身につけさせたい。

《会員名簿訂正》

・住所等の変更

島根県

氏名	〒	住所(自宅または連絡先)	TEL.	勤務先	TEL.
上田 勢子	699-55	島根県鹿足郡六日市町六日市788			
大 利 良 枝	693	出雲市中野町268-20		退職	

岡山県

松田 喜代子	700	岡山市万成西町10-5			
森山 久美	700	岡山市大学町3-5 J. S. Bach 305号	0862-21-8312	山陽学園短期大学	0862-72-6254

広島県

佐々木 信子				呉市教育委員会	
鈴木 明子 (旧姓 吉井)	724-05	東広島市鏡山2丁目360 広島大学ががら第2宿舍3-503	0824-23-7382		
高橋 美与子	720-21	広島県深安郡神辺町川北646	0849-62-0482	広島大学附属福山中・高等学校	0849-41-8350
永尾 忠子				広島県立松永高等学校	0849-33-5141
中野田 明子				退職	
福田 公子	714	笠岡市今立24	08656-2-5433		
松田 恵				退職	

山口県

五島 淑子	747	防府市牟礼2736-6	08397-2-5589		
山田 次郎	753	山口市赤妻町3-85	0839-25-7241		
山本 弥生			08372-5-3483		

・退会

島根県 藤間 幸枝  
広島県 上田 典子 増田 智恵

《新入会員》

鳥取県

氏名	〒	住所(自宅または連絡先)	TEL.	勤務先	TEL.
戸田 美和子	689-23	鳥取県東伯郡東伯町上伊勢101	0858-52-2602	大栄中学校	0858-37-2024

島根県

三原 則美	699-54	島根県鹿足郡六日市町大字抜月14-1 吉賀高校職員住宅304	08567-8-1154	吉賀高等学校	
-------	--------	-----------------------------------	--------------	--------	--

岡山県

遠藤 マツエ	700	岡山市津島中1-2 RE 305		岡山大学教育学部	0862-52-1111
藤井 京子	700	岡山市山崎本町9-2	0862-52-8310	岡山県立岡山芳泉高等学校	0862-64-2801

広島県

栗根 知香	733	広島市西区己斐大迫3丁目38-17	082-273-5878	広島県立廿日市西高等学校	0829-39-1571
進藤 貴美子	734	広島市南区東雲2丁目17-5 メゾン浜本401	082-284-3629	広島大学附属東雲中学校	082-281-3141
森 尚子	724	東広島市西条町西条東1026-1 坪島ハイツ110	0824-23-1428	広島大学大学院生	

山口県

小島 郷子	753	山口市朝田756-2-405	0839-32-0578	山口大学教育学部	0839-22-6111
砂田 京子	754	山口市大字江崎4312-1	0839-89-3696	山口芸術短期大学	08397-2-2880

## 本部だより

平成2年7月7日(土), 8(日)に日本家庭科教育学会平成2年度大会が国立教育会館において開催されました。

53件の研究発表, 聖心女子大学教授有地亨氏の講演「親子のきずな」, 総会などがあり, 盛会裡に終わることができました。

総会においては, 新役員の承認が行われ, 新会長として常葉学園大学, 赤井チサト氏が, 副会長として, 横浜国立大学 三東純子氏, 東京学芸大学 武井洋子氏が承認されました。本地区会からの評議員としては, 新任役員として田結庄順子氏が承認されました。

現在の会員は, 1,042名で, 学会誌は年3回, 1,100部発行されています。この学会誌に, 資料欄が設けられ, 実践事例などが掲載されることとなりました。本地区会からもふるって, 投稿していただきたいものです。なお, 投稿料は, 8,000円となりました。

平成2年度の例会は, 平成2年11月17日(土)に文化女子大学で開かれました。2件の研究発表, シンポジウム「家庭科における家族・家庭生活の学習指導」などがありました。

平成2年度のセミナーは, 平成3年3月26日(火), 27日(水)に開催される予定です。当日, 本地区会の共同研究報告書を本部会員に頒布し, 意見, 感想などを受けたいと思っています。平成3年度大会は, 平成3年6月29・30日の両日国立教育会館で開かれる予定です。

本年度から来年度にかけての行事の一つとしての「家庭教育事典」の編集は来年度刊行をめざして目下進行中とのことです。

国際的な活動としては, アジア地区家政学会(ARAHE)の会議への参加や協力, 国際家政学会評議員会への出席などがなされています。これらの活動へも理解を示し, 積極的に参加したいものです。

(中間美砂子)

## 〈事務局だより〉

### 1. 研究発表会について

第11回研究発表会並びに総会は平成3年8

月24日(土)に広島大学教育学部(東広島市鏡山1丁目)において開催される予定です。研究発表申込み, 詳細な日程等につきましては, 後日改めてご連絡いたします。

会員の皆様方の多数の参加をお願いいたします。

### 2. 地区会費の納入について

平成3年度地区会費を同封の振替用紙でご送金下さい。平成2年度あるいはそれ以前の会費を未納の方はあわせて納入くださるようお願いいたします。

年会費 1,000円

振替口座 広島4-429

加入者名 日本家庭科教育学会中国地区会

### 3. 住所・勤務先の変更について

住所, 勤務先あるいは改姓などの変更のある方は下記事務局までお知らせ下さい。

また退会なさる方も, ご面倒でも事務局までお知らせ下さいますようお願いいたします  
〒734 広島市南区東雲3丁目1-33

広島大学学校教育学部内

日本家庭科教育学会 中国地区会事務局

TEL.082-281-3141

FAX.082-284-2406

(望月てる代・伊藤圭子)

## 〈編集後記〉

会報第11号が出来上がりましたのでお届けいたします。

21世紀まであと10年を残すのみです。今年はその第一歩を踏みだす1年となりました。これまでの10年間は桜井先生, 桑原先生, 西村先生をはじめとする諸先輩のご尽力のお陰で本地区会を成立させ, そして充実させることが出来ました。では, これからの10年間で私達は本地区会をより発展させるために何をなすべきなのでしょう。本地区会がより一層充実し, 活性化した状態で21世紀を迎えられるように, 会員の皆様と共に努めていきたいと思えます。会報に対し, ご意見やご感想をお聞かせ戴ければ幸いです。

末筆ながら, ご多忙のところ, 御執筆をお引き受けくださいました諸先生方に感謝いたします。  
(伊藤 圭子)